



加藤 最近はやっとするその一歩手前の「事故の芽」というものも社内でお互いに出し合っ、芽になる前に摘んでいこうと、「ヒヤリ事故の芽新聞」を作って皆が共有するようにしています。

渡辺 そういう発想に感銘いたします。大事な心がけですね。

環境の時代の 「鉄道復権」に備えて

渡辺 高齢化社会と言われて久しいですが、社会環境を踏まえると、お客さまの数が減少していくことを前提とした経営になっていくかと思えます。鉄道のこれからの社会への役割、また経営のあり方についてお考えをお聞かせください。

加藤 少子高齢化は時代の流れですし、人口問題は一朝一夕には変わりません。ですから、そのトレンドに対応できる経営の仕組み、現場の仕事のやり方をゼロベースで点検し、時代に対応できる形に変えつつあります。一方で従業員には、『お客さまが減ることは一見マイナスだけれども、鉄道は今後、質的に絶対に評価されていく』と言っています。私はそれを「鉄道復権」と言っていますが、一つは、鉄道は高齢者にやさしい公共の乗り物であること。もう一つは、鉄道は環境に非常にやさしいこと。この二つをとっても、鉄道はこれから質的により評価され、大切なものになっていくと思えます。そういう自覚を持って私どもは事業を続けていく。ですから、決して鉄道はお客さまが減るから斜陽になっていくことはあり得ないと考えています。

渡辺 環境の面では、鉄道は自家用乗用車の約9分の1のCO₂排出量で、輸送機関の中で非常に少ない数字です。京阪電車は「パーク&ライド」など環境負荷削減に向けて、とても前向きに取り組んでいらっしゃいますね。

加藤 「パーク&ライド」は車が便利なところは車で、電車で行けるところにはできるだけ電車に乗って行きましょうという非常に合理的な発想です。当社では大津市の公共駐車場にとめて電車でも目的地に向かうとお得になるとか、いろいろ制度があります。特に京都は、車がたくさん入ってくる観光シーズンは非常に道路が混みますから、その辺も含めて今まで以上に取り組んでいきたいと思っています。

渡辺 重要拠点の一つである京都については、新しい戦略を考えておられるとか。

加藤 当社にとって、京都は昔から重要な拠点として大事にしてきました。以前は七条から鴨川沿いに土手の上を走って

いて存在感がありましたが、現在は地下に入って、お客さまからするとどうしても存在感が薄れています。京阪グループには鉄道をはじめ、ホテルやバス事業のほか、京都にいろいろ施設があります。しかし、有機的に連携していない部分があるため、それをもう一度見直して、重点地区と各事業の連携を深める取り組みを始めています。

渡辺 最後に京阪のブランドコンセプトについておうかがいしたいのですが、地域づくり・まちづくりへの取り組みとして「こころまち つくろう」に込められた思い、そして具体的な地域づくり・まちづくりに対してどんな取り組みをしていらっしゃるのかをお聞かせください。

加藤 ひと言で言うと「住みたいまち」にしようというのが基本的な考え方です。まちは成長期があり、そして成熟期がある。それを見据えながら、成熟期になりつつあるまちをどのようにリニューアルしてまた「住みたいまち」に戻していくか。これが一番大事だと思います。当社の沿線は、京都、大阪の昔からの街道筋で、早く開けたがゆえに今はちょっと成熟期を迎えたまちもあります。ですから、これをまた若い人が住みたいようなまちに変えていかなければならない。それは一企業だけではできません。行政とも協力しながらやっということうことで、いま大阪府や各市にもお声掛けしており、当社が先頭を切って順次沿線のまちを活性化しようと動き出したところ。これは時間がかかりますが、しかしそれをやらないと沿線に良い循環が生まれてきません。じっくり腰を据えてやりたいと思っています。

渡辺 「住みたいまち」にすることは、沿線の皆さんから「愛される京阪電車」をさらに発展させていくことにつながるのではうね。それには安全な運行など大きな責任が伴い、社長と社員の皆さんの双肩にずしと重い責任がかかっていることと思います。ぜひ、沿線のまちをいきいきするような取り組みを実現させてください。これからも期待しています。

加藤 ありがとうございます。これからも「おけいはん」ともども、京阪グループをよろしく願っています。

